

CORPORATE PROFILE



社長メッセージ

私たちJX金属は、銅やレアメタルなどに関する先端材料のグローバルプレーヤーです。資源の確保からリサイクルまでの一貫したサプライチェーンのもと事業を展開しています。

近年、デジタルトランスフォーメーションの進展、脱炭素社会形成に向けた動きの加速、資源不足・枯渇懸念の深刻化、企業に求められる社会的責任の高まりなど、私たちを取り巻く社会環境、事業環境は大きな変化に直面しています。

私たちの取り扱う高付加価値な先端材料はスマートデバイスや通信インフラなどに欠かせない材料であり、絶え間ない高品質化・高機能化の追求や機動的な供給体制の構築、新規開発を通してデータ社会の進展を支えています。また、銅やレアメタルなどの金属は持続可能な社会の実現に不可欠な資源であり、これを脱炭素や資源循環などサステナビリティに配慮した形で将来にわたって安定的に供給していくことが私たちの使命であると考え、実現に向けた諸施策に果敢に取り組んでおります。

当社には、創業の日立鉱山時代から、自由闊達な議論を通じ一丸となって困難に立ち向かっていく「仕事本位」の気風があります。今後も社会の変化は加速度的に進むことが予想されますが、変化への挑戦を大胆に行うとともに、ステークホルダーに対する社会的責任を果たしていくことで、企業として持続的な成長を目指してまいります。

引き続き温かいご支援とご鞭撻のほどお願い申し上げます。

JX金属株式会社
代表取締役社長
社長執行役員

林 陽一

JX金属グループフィロソフィー

JX金属グループフィロソフィーとして、Purpose (パーパス)とWay (ウェイ)を言葉にしました。

Purpose (パーパス)とは、私たちの社会的役割・存在意義を意味します。これまでの100年あまり、そして次の100年においても不変なものとして、社会に付加価値をもたらすという未来志向・前進感を表現しました。Way (ウェイ)とは、私たちの行動基準となる価値観を意味します。長い歴史の中で紡ぎ出された言葉をベースに表現しました。

Our Purpose

価値をつくる。未来をつくる。

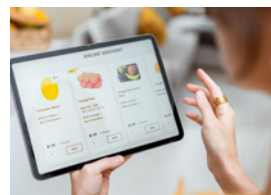
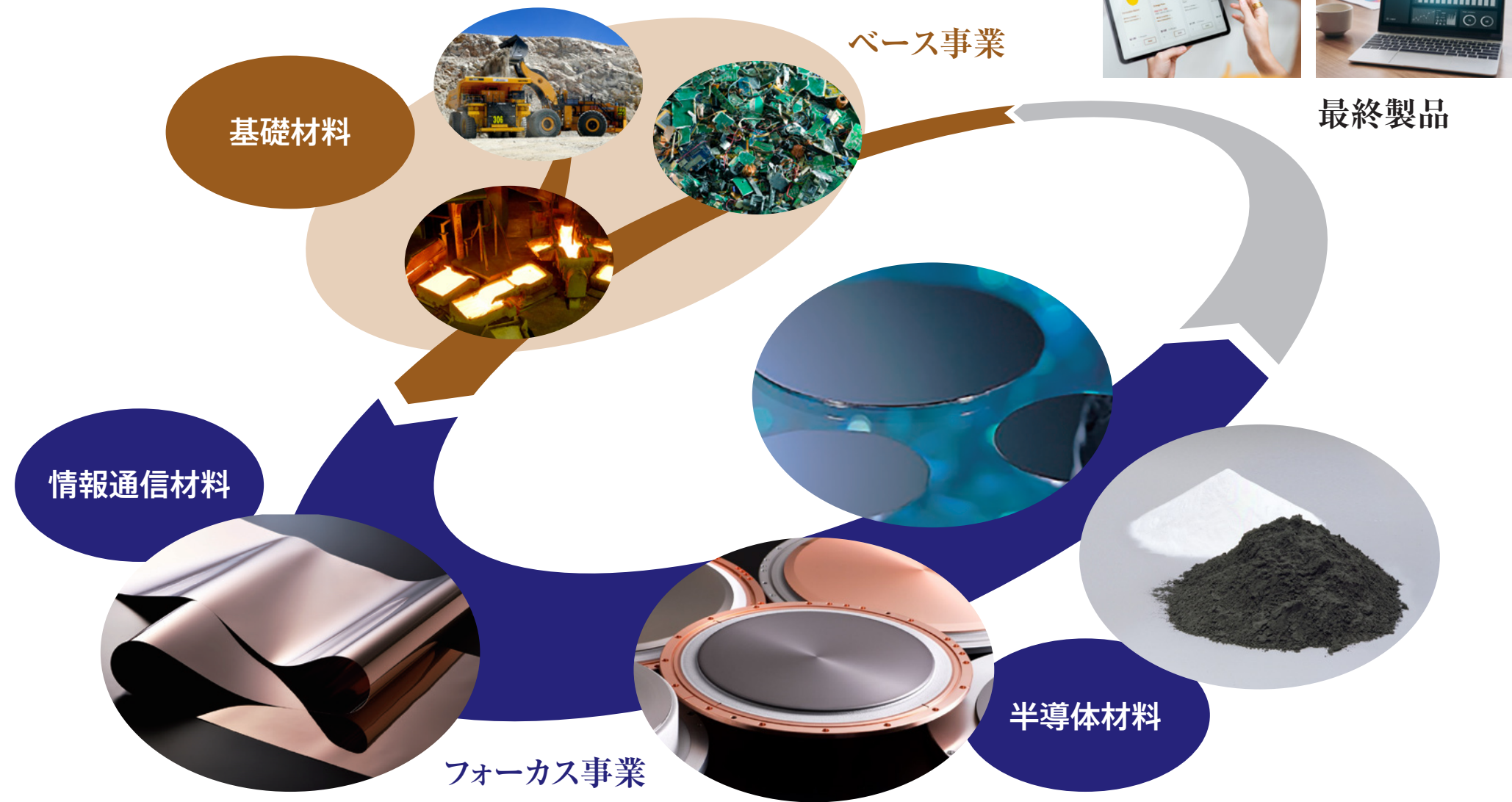
技術で、情熱で、創造力で。

Our Way

- **積極進取** 枠にはまらず、変化や失敗を恐れず、より良いものを追求する。
- **仕事本位** 価値の創出を第一に考え、垣根を越えた自由闊達な議論で課題を解決する。
- **相互尊重** 共に歩む仲間を尊重し、人と人の結びつきを大切にする。
- **共存共栄** 持続可能な事業活動を通じて社会に貢献し、社会と共に発展する。

事業内容

JX金属グループは、銅やレアメタルを中心とした非鉄金属について、資源開発から製錬・リサイクル、先端材料の製造・開発まで一貫した事業を展開しています。

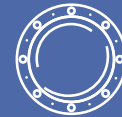


2040年の社会を見据えた戦略的な事業ポートフォリオ

データ社会の進展やSDGs実現への世界的な機運の高まりなど、JX金属グループの事業環境を取り巻く社会トレンドは大きく変容しています。

こうした中、JX金属グループでは「2040年長期ビジョン」を策定し、「技術立脚型企業」への転身を目指しています。

各事業を、成長戦略のコアである「フォーカス事業」と、組織基盤を支える「ベース事業」のいずれかに位置付け、持続可能な成長を目指しています。

フォーカス事業 ▶P5-8へ	半導体材料セグメント	 薄膜材料事業 長年培ってきた高い技術力により、半導体用スパッタリングターゲットをはじめ、化合物半導体材料や高純度金属など、各種高機能デバイス、最先端IT機器、医療機器、電気自動車に使われる製品をグローバルに展開しています。
		 タンタル・ニオブ事業 世界有数のタンタルとニオブの材料メーカーであるTANIOBIS GmbHを中心に、コンデンサや半導体材料用の金属粉、SAWデバイスや光学レンズ用の酸化物、半導体用の塩化物、高機能粉末材料などの安定供給を通じ、IoT・AI社会の発展に貢献しています。
	情報通信材料セグメント	 機能材料事業 長年培ってきた高度な金属加工技術を駆使し、フレキシブル回路基板などに使われる主力製品の圧延銅箔や、コネクタなどに使われるチタン銅、コルソン合金、りん青銅といった伸銅品などの高機能製品の供給などをグローバルに展開しています。
ベース事業 ▶P9-10へ	基礎材料セグメント	 資源事業 南米チリに複数の銅鉱山を保有しており、銅鉱山の安定操業とさらなる生産性向上に努めています。また、今後先端材料分野での需要拡大が期待されるレアメタル鉱山の調査・開発にも積極的に取り組んでいます。
		 金属・リサイクル事業 銅精鉱とリサイクル原料から製錬プロセスを通じて、銅・貴金属など高品質の金属地金を効率的に生産し、当社の先端材料に供するとともに、日本国内およびアジア地域へ安定的に供給しています。近年では、特にリサイクル原料の処理量を増加させることで、循環型社会の構築に貢献しています。



フォーカス事業

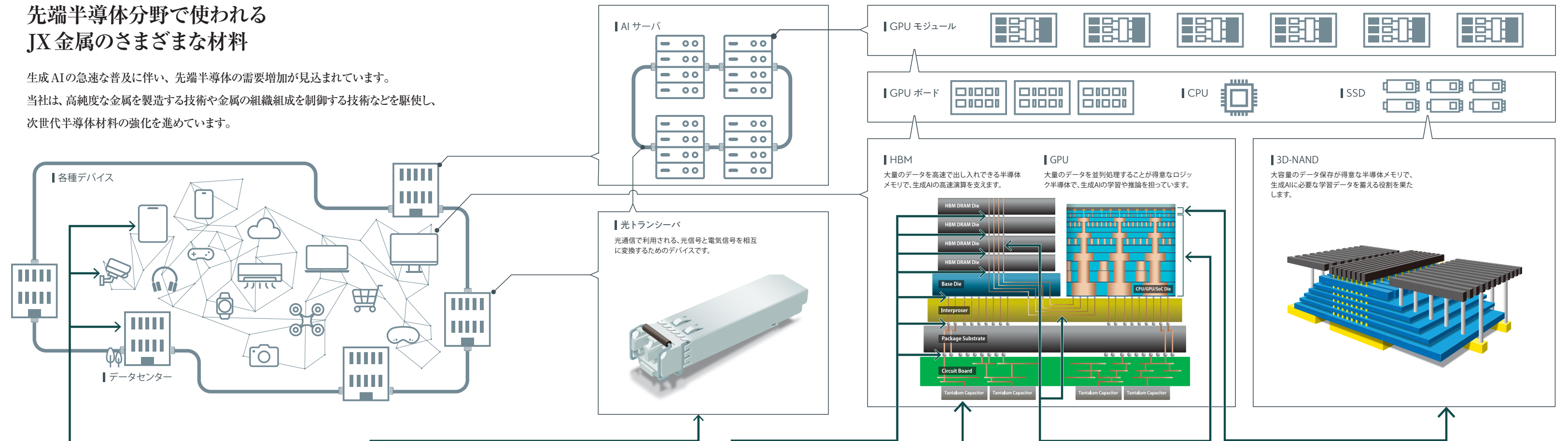
世界トップシェアの高機能・高付加価値な 先端材料で、データ社会の進展を支えます

各産業におけるデジタルデータの活用などにより、先端材料に対するニーズはますます拡大しています。JX金属グループでは、長年培ってきた高純度化や合金化、圧延処理など、高い技術力に支えられた世界トップシェアの高品質な先端材料を世界各国のお客様に供給することで、データ社会の進展に貢献しています。また、蓄積された技術のさらなる発展・進化によるイノベーションに挑戦し、社会の発展と革新に貢献し続けます。



先端半導体分野で使われる JX金属のさまざまな材料

生成AIの急速な普及に伴い、先端半導体の需要増加が見込まれています。
当社は、高純度な金属を製造する技術や金属の組織組成を制御する技術などを駆使し、次世代半導体材料の強化を進めています。



チタン銅箔

当社のチタン銅箔は、優れた高耐熱・高強度を持ち、パソコンやスマートフォンに加え、AIサーバといった高い信頼性が求められる用途にも採用が広がっています。



InP (インジウムリン) 基板

光と電気を相互に変換する受発光素子に使用されています。データ量増加および高速度化に対応する光通信の進展に伴い、当社InP基板の採用の拡大が期待されています。



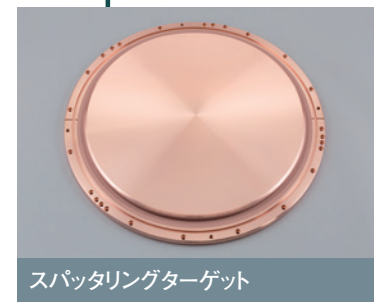
低 α 金属など

当社の高純度な金属材料は、基板とチップの接続や、チップ間の接続などで採用が拡大しています。



高純度タンタル粉

半導体配線のバリアメタル向けスパッタリングターゲット、CVD・ALDプリカーサ材料、コンデンサ、3Dプリンタ向けの金属粉末など幅広く利用されています。



スパッタリングターゲット

最先端のロジック半導体にナノレベルの微細配線を形成するために使用されています。また、チップ間をつなぐ配線などでも採用が増えています。



CVD・ALDプリカーサ材料

最先端ロジックのトランジスタや3D NANDのワード線など、非常に細く深い箇所の配線形成で採用の拡大が期待されています。

J X金属グループが取り扱う主な先端材料

半導体用スパッタリングターゲット 薄膜材料事業

半導体の信頼性向上に貢献する 高品質なターゲットをタイムリーに提供

半導体ウェハーに微細な配線パターンを形成するために使用される材料です。J X金属では銅をはじめ、タンタル、チタン、タングステン、コバルトなど、さまざまな種類のスパッタリングターゲットを提供しています。長年の事業活動で培った高純度化など高度な技術により、高品質な製品を安定的に生産しています。また、世界4カ所の加工工場を持ち、お客様が求める製品をタイムリーに提供できる体制を築いています。

世界シェア



一次用途例

半導体（メモリー、ロジックなど）

最終用途例

スマートフォン、PC・家電、通信インフラ・データセンター、自動車

FPC用圧延銅箔 機能材料事業

優れた屈曲性能・耐久性能で スマートフォンの小型化・長寿命化に貢献

スマートフォン内部の部品と部品をつなぐ折り曲げ可能な配線材料であるFPC（フレキシブルプリント基板）に用いられており、スマートフォンの小型化や長寿命化に貢献しています。原材料の銅インゴット鑄造から圧延加工、表面処理まで、J X金属グループ内で一貫した工程を保有しており、世界中でその高品質が認められ、高いシェアを誇っています。

世界シェア



一次用途例

FPC（フレキシブルプリント基板）

最終用途例

スマートフォン、PC・家電、自動車

高純度タンタル粉 タンタル・ニオブ事業

半導体配線やコンデンサに欠かせない 高品質なタンタル粉を安定的に供給

半導体配線のバリアメタル向けスパッタリングターゲット、CVD・ALDプリカーサ材料、コンデンサ、3Dプリンタ向けの金属粉末など幅広く利用されています。

世界シェア



一次用途例

半導体用スパッタリングターゲット、コンデンサ

最終用途例

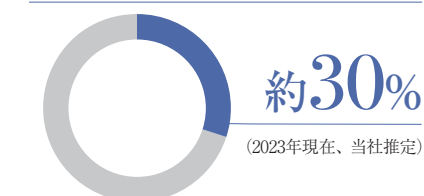
スマートフォン、PC・家電、通信インフラ・データセンター、自動車

インジウムリン化合物半導体基板 薄膜材料事業

高度な技術に裏付けられた 各種化合物半導体基板

化合物半導体とは、複数の元素を材料にしている半導体のことを指し、「高速の信号処理に優れている」「光に反応する」など、シリコン半導体にはないユニークな性質を示します。J X金属では、高速・高信頼通信を支える光通信モジュール（受発光素子）に欠かせないInP（インジウムリン）基板をはじめとする、各種化合物半導体基板を提供しています。高速・大容量のデータ伝送を可能にする光通信に欠かせない材料です。

世界シェア



一次用途例

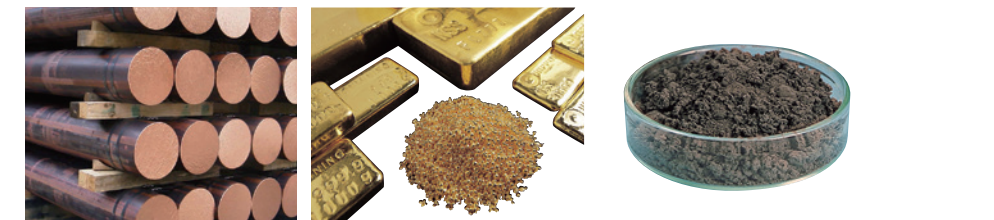
光通信デバイス、高周波デバイス

最終用途例

通信インフラ・データセンター、自動車

ベース事業

世界人口の増加や開発途上国の経済成長、さらには脱炭素への急速な関心の高まりなどに伴い、非鉄金属資源の需要は今後さらに増加すると見込まれています。一方で、良質な資源は獲得競争の対象となり、資源不足・枯渇や地域的な偏在が深刻化しています。JX金属グループでは、社会の発展に不可欠な銅・レアメタルをはじめとする非鉄金属を安定的に供給することが社会的使命であるとの認識のもと、資源事業、金属・リサイクル事業それぞれの競争力強化に努めるとともに、循環型社会の構築に向けた取り組みを推進しています。



資源事業

世界的に銅精鉱中の銅品位が低下し、不純物が高まる傾向にある中、高品位でクリーンな銅精鉱の価値が高まっています。

当社が権益を保有するチリのカセロネス銅鉱山の銅精鉱は、不純物が少なく、JX金属製錬（株）佐賀関製錬所の有力な原料となっています。カセロネス銅鉱山以外にも、ロス・ペランプレス銅鉱山やエスコンディーダ銅鉱山といった海外優良鉱山の権益を保有しており、原料の安定確保を図っています。

また、先端材料に必要な原料のサプライチェーン確保のため、レアメタル鉱山の調査・開発にも積極的に取り組んでおり、2022年にはブラジルのミブラ鉱山におけるタンタル原料生産事業に参画しました。



カセロネス銅鉱山



ロス・ペランブレス銅鉱山



エスコンディータ銅鉱山



ミブラ鉦山

金属・リサイクル事業

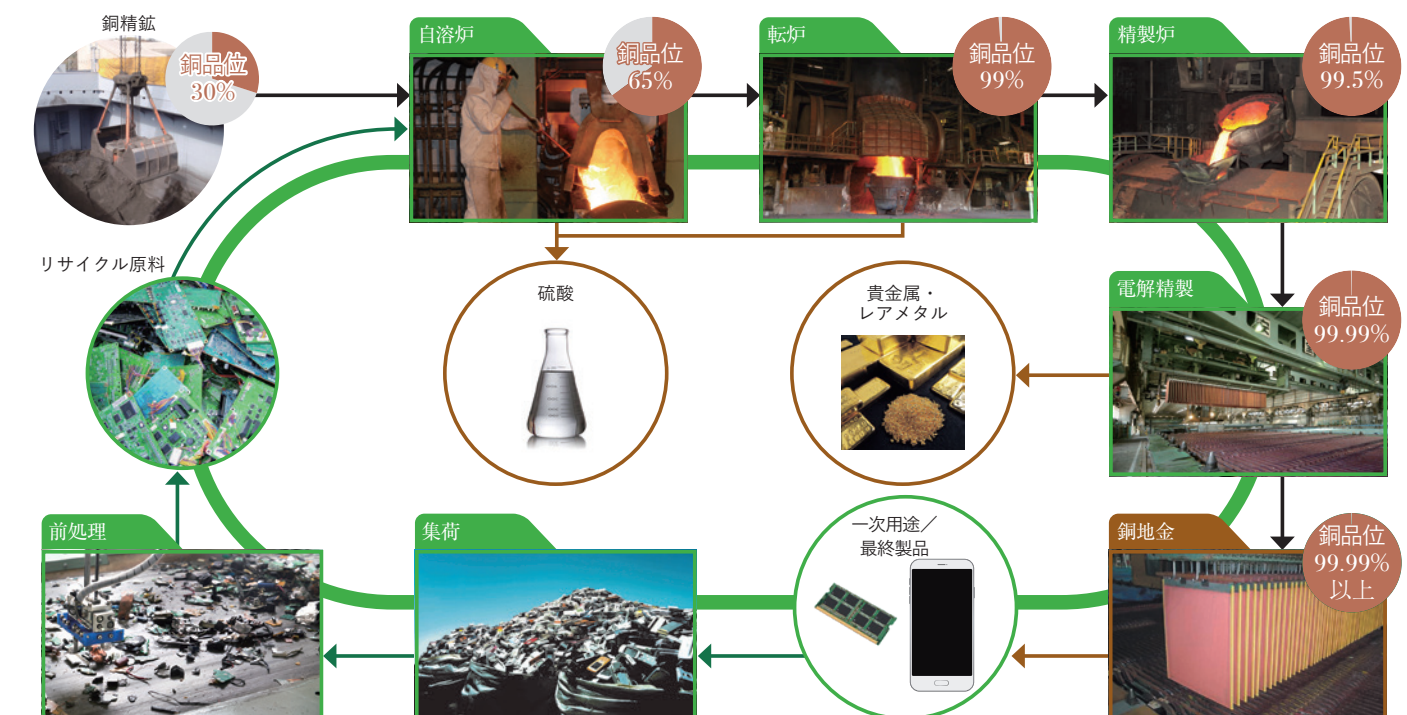
J X 金属グループでは、金属製錬とリサイクルの一体的な事業運営を推進しています。銅鉱石と使用済み家電製品・電子機器などのリサイクル原料から、高効率な製錬プロセスを通じて純度99.99%以上の銅地金を生産するとともに、銅を製錬する過程の副産物として、貴金属や硫酸などの生産を行っています。これらの製品を、当社先端材料に供するとともに、日本国内やアジア地域をはじめとする世界各地へ安定的に供給しています。

ＪＸ金属製錬（株）佐賀関製錬所で行う「グリーンハイブリッド製錬」は、鉱石中の硫黄分の反応熱を用いて溶解を行う環境負荷の少ない製錬法で、余剰熱を活用したりサイクル原料の処理を行っています。2040年にはリサイクル原料比率を50%まで高めることを目標に、技術確立やリサイクル原料の増集荷・増処理体制の確立を進めています。

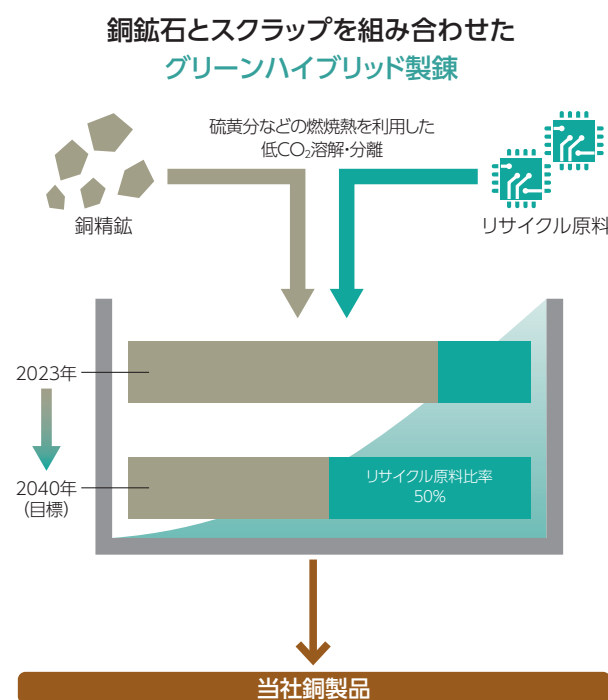


佐賀関製錬所

事業プロセス



グリーンハイブリッド製錬





研究開発

J X金属グループは、長年培ってきた非鉄金属に関する技術や知見を活かし、世の中に進化をもたらす製品・技術をいち早く社会に提供できる「技術立脚型企业」を目指して、積極的な研究開発を推進しています。

コア技術の進化・発展

創業以来100年以上にわたって培ってきた、競争力の源泉であるコア技術を進化・発展させ、先端材料のさらなる可能性を追求していきます。

<J X金属のコア技術>

- 高純度化
- 組成・組織制御
- 粉体制御
- 精密圧延・精密加工
- 表面制御
- 分析・評価・解析
- 分離・抽出・精製

スタートアップ企業との協業

J X金属が保有するコア技術と、スタートアップ企業が保有する革新的技術を組み合わせることで、新たな価値を有する先端材料を創出し、今後の社会発展に貢献していきます。

<協業実績の一例>

- NanoWired 社（金属ナノワイヤーによる低温接合技術）
- マテリアル・コンセプト社（銅ペースト技術）
- Alloyed 社（金属3Dプリンター向け合金設計）
- ロータス・サーマル・ソリューション社（多孔質金属材料）
- Gaianixx 社（多能性[®]中間膜の技術）

グループシナジー

グループ各社が保有する技術・知見およびその他の経営資源を結集し、有機的かつ機動的に活用することで、新たな付加価値を生み出していきます。

<主なグループ企業>

- タツタ電線株式会社
- TANIOWIS GmbH
- 東邦チタニウム株式会社

産学連携の推進

銅やレア金属の安定供給や先端材料の開発、次世代を担う人材の育成などを目的として、大学など研究機関との連携を積極的に推進しています。

<大学との連携の一例>

- 東京大学「非鉄金属資源循環工学寄付研究部門」の設置（2012年～）
- 東北大学「組織的連携協力協定」を締結（2018年～）
- 早稲田大学「J X金属寄付チェア」の設置（2023年～）



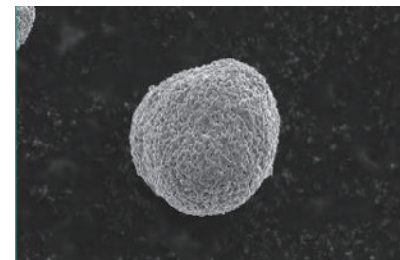
研究テーマの一例

リチウムイオン電池リサイクルと次世代電池材料開発

世界各国で温暖化対策を目的としたEV（電気自動車）の普及を促す動きが顕著になっています。これにより、EV用のリチウムイオン電池（LiB）に必要なレアメタルなどの資源は高騰や枯渇が懸念されています。一方で、使用済みとなったLiBの大量廃棄も予想され、資源を安全かつ効率的に回収できるリサイクルの体制が求められています。J X金属では2009年からいち早く、LiBのレアメタルリサイクル実証試験に着手しており、現在は、使用済み車載用LiBに含まれるレアメタルを再び電池の原料として使用する「クローズドループ・リサイクル」の実現に向けた技術開発を進めています。また、次世代の蓄電池として実用化が期待されている全固体電池用正極材料の開発にも力を入れています。



車載用LiBリサイクルのための実証試験設備



全固体電池用正極材料（開発中）

次世代半導体向け配線材料開発

近年、半導体の構造はますます複雑かつ微細になり、より先進的な材料の開発が求められています。J X金属では長年培った高純度化技術、塩化技術に応用し、CVD（Chemical Vapor Deposition）と呼ばれる半導体の最先端プロセスに用いられる金属塩化物原料の開発を行っています。また、J X金属では2018年に東北大学と組織的連携協力協定を締結し、産学連携による次世代配線材料の研究開発にも積極的に取り組んでいます。



先端半導体デバイスに用いられる高純度塩化金属



サステナビリティ

現代において企業が長期的に成長するためにはサステナビリティの視点が欠かせません。J X金属グループは銅やレアメタルなどに関する先端材料のグローバルプレーヤーとして、サステナビリティ経営を積極的に推進しています。

（写真）煙害で荒廃した山に緑を取り戻した日立鉱山の犬島桜

J X金属グループのマテリアリティ （重要課題）

J X金属グループは、2040年長期ビジョンの実現に向けて6つのマテリアリティ（重要課題）を特定し、活動を推進しています。また、マテリアリティにはそれぞれKPI（重要業績評価指標）を設定しており、サステナビリティ推進会議でその達成度合いを測定・評価しながら運用しています。

地球環境保全への貢献

くらしを支える先端材料の提供

魅力ある職場の実現

人権の尊重

地域コミュニティとの共存共栄

ガバナンスの強化

優先して取り組む項目

気候変動への対応

世界各国・各地域で脱炭素への動きが加速する中、J X金属グループでは「2030年度までにCO₂自社総排出量2018年度比50%削減、2050年度ネットゼロ」という大きな目標を掲げ、脱炭素化に向けた取り組みを強化しています。

循環型社会への貢献

J X金属グループは素材産業に関わる企業として、資源の価値を最大限に保ちながら循環を繰り返し、最終的に廃棄される資源を最小化していくことが使命であると考えています。自社の高度な技術力を活かした資源循環に取り組むとともに、外部企業や研究機関とも連携しながら循環型社会の構築に貢献していきます。

国際規範・イニシアティブへの対応

J X金属グループは、各種業界団体への積極的な参画や、国際規範・イニシアティブなどの社会的要請に準拠することを通じて、持続可能な社会の実現に貢献していくことに努めています。今後もグローバルに事業を展開する国際社会の一員として社会的責任を果たしていきます。

サステナビリティサイト

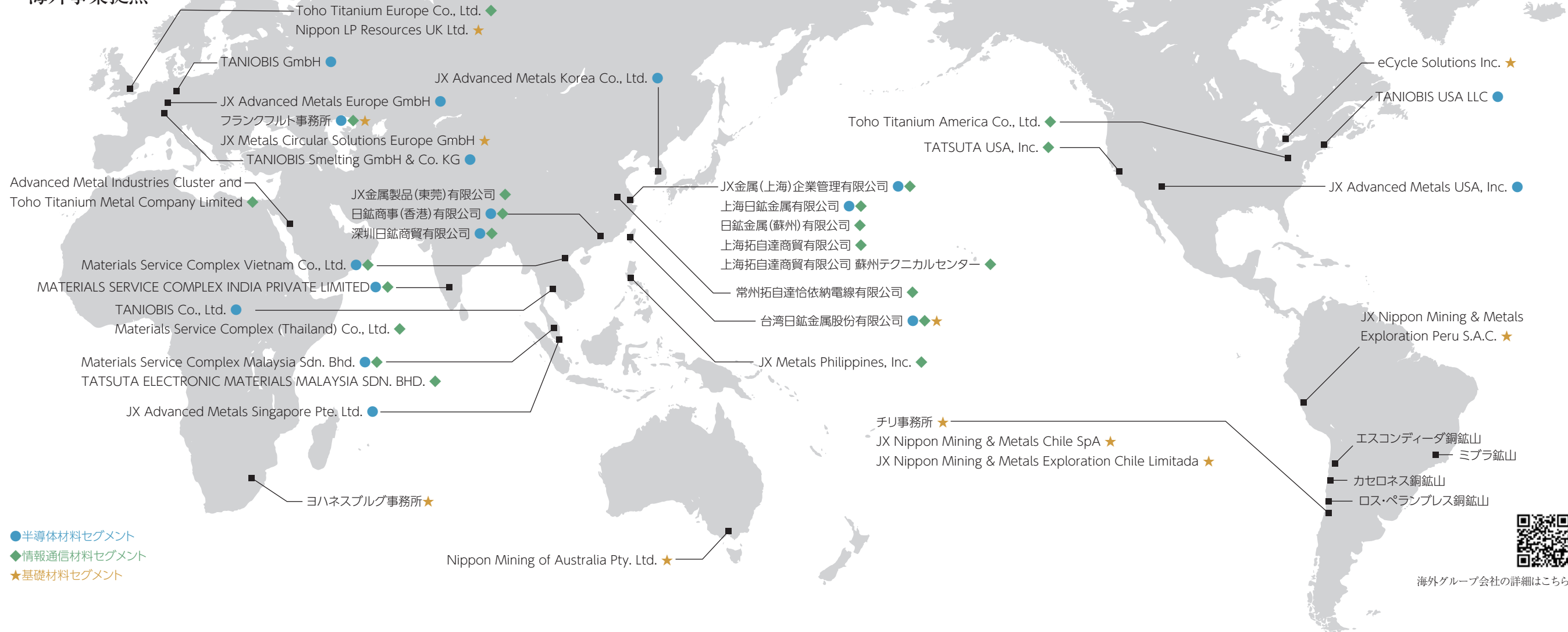
▶<https://www.jx-nmm.com/sustainability/>



ネットワーク

JX金属グループは、世界各地に拠点を展開しています。
緊密な情報共有と連携強化により、お客様のニーズにお応えします。

海外事業拠点



海外グループ会社の詳細はこちら



国内製造拠点



国内グループ会社の詳細はこちら



沿革



会社概要

会社名	J X金属株式会社 JX Advanced Metals Corporation
資本金	750億円
本社所在地	〒105-8417 東京都港区虎ノ門二丁目10番4号 オークラ プレステージタワー TEL：03-6433-6000（代表）
事業内容	薄膜材料事業 タンタル・ニオブ事業 機能材料事業 資源事業 金属・リサイクル事業
従業員数	連結：10,413名 単体：3,267名（2025年3月）





J X金属株式会社 会社案内

〒105-8417 東京都港区虎ノ門 2-10-4 オークラ プレスステージタワー

TEL : 03-6433-6000 (代表)

<https://www.jx-nmm.com/>



Printed in Japan

2025.12